

1. エンゲル係数の妥当性がつねに問題になるが、それがただ適合度の問題に過ぎないのか、それともより基本的・社会的な問題に根ざしているのかを検討する。

2. そもそもエンゲル係数概念は産業資本主義段階で定義されたものであるから、これを今日の独占資本主義段階で同じような意味での使用に堪えられるかどうかの吟味から出発して問題に接近する。

3. 産業資本主義段階では資本は不足気味である。独占資本の段階では資本は過剰になり有利な投資の場を求め、日本では新重化学工業の確立発展に対応して食品加工が重要な産業分野を形成する。そして食料・被服・住居・光熱その他家計用消費財の生産にあたってその労働の生産性がほぼ等しくなるような方向に拡大再生産が展開される。だから費目別家計消費割合はその所得の大小にだけ直接基づくというよりは、それら費目別消費財の社会的総生産割合を表現する筈のものとなる。最早エンゲル係数は貧しい時の指標にはなり得ても富裕の直接的指標ではあり得ない。食料資本は資本の循環を完結させるため消費を強制し、ここにサービス産業部間が拡大して雑費の中で外食の形で食費は拡大する。だからエンゲル係数の低下は必ずしも現われない。今後は単純に同係数が低下するのではなく、他の費目消費財の生産性の変化→食料生産の変化→食料消費の変化という経緯のもとに理解すべきである。